

生活

“传述遗华日本人等的体验和苦难经历的战后世代的讲述人”活动启动了！

ちゅうごくざんりゅうほうじんとう たいけん るうく かた つ せんごせだい かた べ たんじょう
「中国残留邦人等の体験と労苦を語り継ぐ戦後世代の語り部」が誕生しました！

去年，是 1945 年第二次世界大战结束 75 周年。

遗留孤儿们当中战争结束前后出生的人如今也都已经步入了 75 岁以上的年龄段。而那时刚开始懂事，年龄在 5、6 岁以上，当时的状况还能模模糊糊地有些记忆的人，也都已经是 80 岁以上的高龄了。此外，那些在日本出生长大，对移居满洲的情景、苏联参战后的混乱和逃亡、以及那之后的中国社会的变化，所有这些经历都保留在记忆中的遗华妇女等的人们，其年龄也都已经超过了 90 岁。

在请这些遗留日本人本人来讲述当时的经历已经变得越来越难的情况下，首都圏中国帰国者支援・交流中心接受厚生労働省の委託，从 2016 年度起，开始了培养“传述遗华日本人等的体验和苦难经历的战后世代的讲述人”的培训工作。

现在，结束了为期三年培训的 7 名第一期生，已经开始了讲述人的讲演活动。此外，6 名完成了培训的第二期生，也开始了讲演活动的准备工作。报名参加培训班的人里也包括了归国者的第二、三代，不过大部分报名者都是与归国者没有什么血缘关系，是出于对这项活动很感兴趣而踊跃参加的人。

讲述人的培训，主要是以中国、库页岛（萨哈林）的归国者为对象，听取他们不得被遗留下来的经过、在中国或是库页岛的生活、想返回日本的心境以及返回的历程、回到日本后经历的苦难等等的体验。与此同时，培训班的成员们还参加了由专家们讲授的有关历史背景的课程，并到开拓团的慰灵碑、与遗留日本人有关联的场所去访问，听取相关的经过和由来。此外，他们还听取了

さくねん だいにじせかいたいせん しゅうけつ ねん
昨年は第二次世界大戦の終結した 1945 年から
75 年の年でした。

こじ みな しゅうせんぜんご う かた いま
残留孤児の皆さんも、終戦前後に生まれた方は今
や 70 代後半となり、物心がついて当時の記憶がか
すかに残っているであろう当時 5、6 歳以上の方は、
80 歳以上。さらに、日本で生まれ育ち、満洲の地へ
わたったことも、ソ連参戦後の混乱や逃避行、その後
の中国の社会の変化もすべて記憶にある残留婦人等
の方々は、90 を超える年齢となっています。

残留邦人ご本人に体験をお話いただくのも、なか
なか難しくなってきた状況の中、首都圏中国帰国
者支援・交流センターでは厚生労働省の委託を
う受け、2016 年度より「中国残留邦人等の

体験と労苦を語り継ぐ戦後世代の語り部」

を育成する研修を始めました。

現在 3 年間の研修を終えた 1 期生

7 名が、「語り部」講話活動を始めています。さらに、
2 期生 6 名が研修を修了し、講話活動への準備中
です。語り部に応募してくれた人の中には、帰国者二三
世も含まれますが、大半は帰国者と血縁はないなが
ら、この活動に関心をもって飛び込んでくれた人
です。

語り部研修は、主に中国や樺太（サハリン）帰国者か
ら、残留を余儀なくされた経緯や、中国や樺太での生
活、日本に帰るに至った心境や経緯、日本に帰って
からの苦労などの体験を聞き取ることを中心に行
われました。また並行して専門家から歴史的背景の
講義を受けたり、実際に开拓団の慰灵碑や残留邦人
にゆかりのある場所を訪ね、お話を聞いたりもしまし
た。また広島や長崎の被爆者の体験を語り継いでいる



伝述広島、長崎被爆者の体験の戦后世代の講演，同様に作为伝述战争体験の传承人，去聆听他们参加这项活动的心理准备，也接受一些有关演讲技巧的经验和建议等。此外，为了把这段历史更好地传述给不太了解遗留日本人的问题的年轻一代，讲述人们在撰写手稿时，尽量使内容通俗易懂。

2020年9月5日，在东京代代木的奥林匹克中心举办的“加深对遗华日本人等的理解的集会 在东京”中，6名第一期生各自发表了演讲。奇缘巧合的是，这个会场竟曾是访日寻找亲人调查的场所。

有讲述作为遗留妇女的自己祖母的经历、也有讲述作为遗留孤儿的自己父亲或是母亲的经历的归国者第二、三代的讲述人；还有讲述一位遗留孤儿经历的讲述人。讲的是：一位遗留孤儿在苏联参战的当时还只有7岁，看着全家人死在自己的面前，只有自己一个人逃了出来。后来得到“救命恩人”的相助，从战争结束后的混乱中、以及后来中国社会的变动中艰辛地活下来的经历。

看起来，凝结了三年的培训成果的演讲，给听众们的心里带来了极大的震动。

听过讲述人演讲的听众给我们写来了以下的感想。

“原来以为不是亲身体验者讲述就难以使听者体会到那份感受，但是他们讲得真好，听起来感同身受。”“在聆听遗华日本人等的体验和经历的同时，也深切感受到了讲述人们努力要把这些人的经历传述下去的意志。”

为了不使中国、库页岛遗留日本人的经历因风化而被忘却，首都圏中心将会再接再厉地为进一步充实讲述人材的培训、举办演讲会活动继续努力。(Y)

戦後世代の方の語りを聞き、同じ戦争体験を伝承する者としてその心構えを聞いたり、語法技術のアドバイス等も受けたりしました。そして残留邦人問題をよく知らない若い世代にも伝わるように、わかりやすい原稿を作成することを心掛けました。

2020年9月5日に東京代々木のオリンピックセンターで行われた「中国残留邦人等への理解を深める集いin東京」では、1期生6名がそれぞれの語りを披露しました。この会場は奇しくも訪日肉親捜し調査の場所でした。

残留婦人である自身の祖母の体験や、残留孤児である父や母の体験を語った帰国者2世、3世の語り部。またソ連参戦時、7歳の時、目の前で家族の命を奪われ、たった一人の逃避行となり、「命の恩人」に助けられながら戦後の混乱や中国社会を生き抜いた残留孤児の体験を語った語り部もいました。

3年間の研修の成果を結集した語りは、聴衆の胸に大いに響くものがあつたようです。

語り部の語りを聞いた方々からは次のような感想が寄せられました。

「体験者でないと伝わらないと思っていたが、十分伝わってきた」「この話を伝えていかなければ、という語り部の意思も同時に伝わってきた」

首都圏センターでも、中国・樺太残留邦人の方々の体験が風化し忘れ去られることがないように、引き続き語り部育成のための研修の充実や講話会の開催に尽力していくつもりです。(Y)

